第3種郵便物認可　朝日新聞　1982年(昭和57年)6月11日　金曜日　12版　(14)

みんなの老後

「つい」の時 理想と現実

「臨終の看取り」総理府調査から

「畳の上で」と願っているが 半数は病院などで

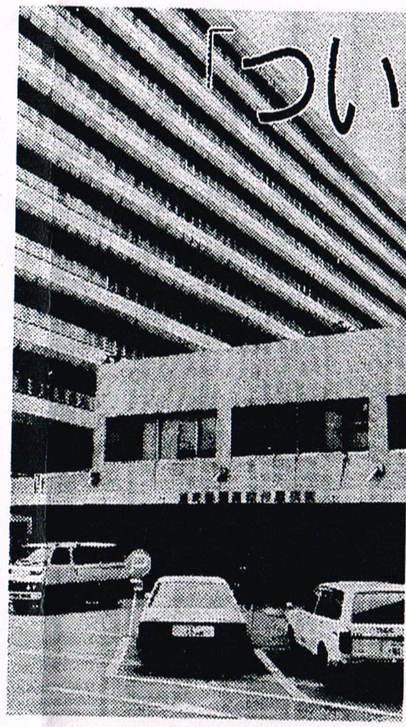
畳の上（自宅）で、家族に看取（みと）られて安らかに——が一生を終えるときの日本人の理想の姿、といわれてきた。が、現実はどうか。「つい」の看取りに関する総理府の調査（総括責任者・那須宗一中央大学教授）がまとまった。この種の本格的な調査は初めてだという。

調査は五十五年七月末までの一年間に、七十歳以上八十五歳未満で亡くなった人千五百人の家族、および同年十二月一日現在で七十歳以上八十五歳未満のお年寄り千五百人を対象に行われた。老人ホームで亡くなった人は、家族の介護がされていない場合が多いと考えられ、除いた。調査地域は全国。

【臨終の場所】 亡くなった人で、生前「ついの場所」について希望を言った人三〇・四%、そのうち「自宅」を望んだ人九四・四%、「病院など」をあげた人三・二%。お年寄りで、「ついの場所」の希望を持っている人五二・一%。そのうち「自宅」を望んでいる人七四・九%、「病院など」は六・二%。しかし現実は、自宅で亡くなった人四九・五%、病院などで亡くなった人四九・三%。

調査担当者の一人で、東京都老人総合研究所の井上勝也心理研究室長の分析と意見は次のようだ。

「畳の上で、という願望は満たされていない。病院死が半数に達している。病気を治そうとして入院した結果の死もあるだろうし、ある程度、仕方のないことだろう。この傾向は今後、さらに強まりそうだ。十分な医療を受け、しかも自宅で死にたい、という希望を双方とも満たすにはどうすればいいか。"自宅の病院化"といったことができればと思う。たとえば看護婦を派遣して、医師の指導のもとに点滴を看護婦にやらせるなど、在宅看護の制度化だ」



病院や診療所などで死を迎える傾向が今後も強まりそうだ

●子のそばで

【臨終の立会者】 配偶者がいる人のうち、その立ち会いがあったのは八二・七%。同じように子供が立ち会ったのは八二・一%、子の配偶者（嫁または婿）の立ち会い六七・五%、孫の立ち会い三六・四%、兄弟姉妹は三〇%、他の親族二八・一%。「立会者なし」五・五%。

一方、お年寄りが立ち会ってほしいと願っている人は、配偶者五一・四%、子供六五・七%、子の配偶者一五・四%、孫一三・九%、兄弟姉妹八・四%、他の親族三・九%。子供の立ち会い希望が配偶者より多く、嫁（または婿）はあまり望まれていない。

「立ち会ってもらう人の、希望と現実のずれは解釈が難しいが、それ以前の人間関係の反映などさまざまな要素があると思う。それにしても、今は若い人が死を見る機会が少ない。孫がいても立ち会ったのは三割程度。昔は家で死ぬのが当たり前だった。今はそれだけ死が管理されている、といえるのかも」

●安らかな姿

【臨終時の表情】 「安らかな安堵（あんど）の表情だった」のが七〇・六%、「苦痛の表情だった」が一〇・七%、「興奮もしくは緊張の表情だった」が一・五%、「無表情だった」が一四%。死因別では、老衰が「安らか」七九・七%、「苦痛」三・四%、悪性新生物（がん）が「安らか」六九・二%、「苦痛」一九・九%。

「『安らか派』が多いのは救いだ。『無表情』を『苦痛』でなく『安らか』に入れれば八五%になる」

【その他】 安らかな死を迎えられるよう、日ごろ何か心がけている人は五四・六%。内容は「神仏を信じる」二九・六%、「健康の保持に努める」二一・五%、「家族と折り合うようにする」七・六%、「しっかりした気持ちを持つ」六・五%、「身辺の整理をしておく」二・九%、「余生を他人や社会に貢献する」二・一%。

最後の床についていて、死や、死後への恐れを訴えた人は「よく」「時々」「たまに」を合わせて一七%。「全く訴えなかった」が七八・六%。

亡くなった人で、墓を決めていた人八七・三%、形見分けをした人九・五%、葬式のしかたに希望があった人九・一%、遺言を残した人六・八%、辞世を残した人二・三%。

晩年万華

脱出防ぐ介護の施設を

さまよう

日高　登 ㉚

職員の少ない休日の早朝、ベッド室に入居していた老人が施設を飛び出した。二カ月ほど前、定期的に診てもらっている精神科医から「しばらくすると徘徊（はいかい）をはじめるはずだ」と診断されていた人だ。

休みをとっている職員なども動員して、周辺の住宅地や路地裏まで丹念に捜したが発見できない。間もなく警察から「救急病院に収容されている」と知らせがあった。ホームから歩いて三十分ぐらいの大通りの交差点近くで倒れていたらしく、ベルトに縫いつけてあった施設の電話番号を見て連絡してきたという。

車で迎えに行くと、老人は頭に包帯を巻いて、廊下のイスに腰をおろしていた。右のほおとまゆの上にけがをしている。事情を聴いたが「つまずいた」というだけでさっぱり状況はわからなかった。

別の日、個室で暮らしている老女が夕食の時刻になって部屋にいないことがわかった。彼女は一人で外へ出ると簡単には帰って来られず、これまでも大騒ぎになったことが何回かある。家族に電話で問い合わせてみたが、立ち寄った様子はなく「いつもすみませんね」という返事だった。

以前、迷ってふらふらしているところを発見した数カ所を中心に、手分けして捜し回ったが見つからない。なるべくなら外部の人に負担をかけたくないのだが、夜九時を過ぎたので、警察の力も借りることにした。

そうこうするうちに夜が更け、ひょっこり彼女が帰って来た。「買い物に行って、いったんは施設の近くまで帰って来たけれど、間違えてまた遠くへ行ってしまった」という。しかし買ったはずの品物や持って出たカサは、どこへ置き忘れたのか身につけていなかった。詳しい説明になると、言葉がその都度変わるので正確なことはわからないが、交通事故などにあうこともなく無事だったのは何より、とみんなほっと胸をなでおろした。

老人が行方不明になると「管理をきちんとし、十分に目を行き届かせていれば、周囲が余計な手間をかけなくてすむのに……」と非難されることがある。しかし、老人ホームは入居者を一室に監禁したり、四六時中監視する施設ではなく、そんな権限もない。帰り道がわからなくなったり、放浪癖のある老人をかかえ、手をやいているという話は一般の家庭でもしばしば聞くが、そういうお年寄りの行動を規制、管理できる施設は、いまのところ精神病院以外にない。だから、痴呆（ちほう）状態の老人の行動について厳しい指摘を受けると「そろそろ入院を検討しなければならないのか……」と思案し、寝つきの悪い夜を過ごすことになる。

特別養護老人ホーム長で医師でもある中川晶輝氏は、痴呆老人の対策として最も実際的なのは「精神障害老人専門の特養ホームをつくることだ」と主張している。「それは常勤の精神科医や医療ケースワーカーを配置するとともに、施設の外へ脱出する危険を防止する方策を講ずることが条件だ。しかし、精神病院であってはならない。今日の医療体系にのった"病院"にすると、どうしても採算をとるために不必要な医療（薬・検査づけ）をし、点数にならない"介護"はおろそかにされるからだ。それは必然的に老人を死に追いやることになる」といっている。

痴呆性老人が自宅や施設で、ほかの人たちといっしょに暮らせる道はないものか、なお追究する必要があるが、中川氏の提案は、現状打開のために、実現してほしい対応の一つだと思う。

（老人福祉施設長）

え・田村　能里子

呆（ぼ）け老人をかかえる家族の会・東京のつどい

十三日午後一時半—四時、中野区立堀江老人福祉センター（中野駅南口下車徒歩数分）で。テーマは「問題行動について」。講師は社会福祉法人浴風会病院の竹中星郎医師。会場整理費百円。問い合わせ電話〇三—七七七—四六〇六または〇四二二—四四—二〇七二（いずれも世話人宅なので午後六時以降に）

談話室

心の若さで「迷い」を追い払おう

老齢となると、どうしても自分の死のことを考える。いのちの乏しくなったことのはかなさに心が痛む。人間はまことに弱いもので、救われがたいと思う。まだいつ来るか分からない死を考えてウロウロするのは、ばかげたことだと思ってもどうしようもない。

私はあの世のことをよく思う。あの世があるのではないか。そこで父に、母に、兄に、姉に、弟に会えるのではないか。八人の子供を立派に育て、ただそのことのためにこの世に生まれてきて、お役目を果たし「じゃ、おっかさんはあの世へゆくからね」と、私たちと別れていった母。何よりも、もう一度その母に会いたい。

母の生涯を思うと、死のことをどうのこうのと考えるのはぜいたくのような気もする。死に対処するうまいチエはないかと、あれこれ仏教書を読むが、迷いは増すばかり。むしろ死の迷いを追いやって、百歳二百歳まで生きてやろうと毎日を張りつめて生きた方がいいのか、とも思う。身は老いたが人には負けない心、精神の若さに感謝して、有意義な生活を続けていこうと思う。

（東京都目黒区　岩間清久　自由業　74歳）

秋から同居します

この秋から、私の両親と同居する予定です。今流行の二世帯住宅です。同居の話が具体化したら、急に老人問題を扱った記事が目につくようになりました。

私の両親は、現在二人ともピンピンしていて、私たちのほうが経済的にも子どもの事などでも、いろいろと助けてもらっているのです。でも七十歳近い両親です。「みんなの老後」に出てくる病気、ぼけ、寝たきりなどの事柄が、十年、二十年たつうちには必ず起きてくると思います。

老人問題を扱った本なども何冊か読んで、その複雑さ、深刻さに、今までひとごとのように構えていた自分ののんきさにあきれました。今は老人特有の心理や病気などを勉強し、両親に満足できる老後を送ってもらうべく努力しようと考えています。

親の老後を考えることは、自分の老後を考えることでもあります。人間として必ず通る道〈老いと死〉に、性根をすえて対処しよう、不遜（ふそん）かもしれませんが、そう思うようになりました。

（浦和市　匿名希望　主婦　32歳）

〈係から〉このページは毎週金曜日に掲載します。「談話室」への投稿（五百字以内）やご意見などは〒104—91東京京橋局私書箱三〇〇号、朝日新聞学芸部「みんなの老後」係へ。

本だな

体験記　寝たきり老人介護

京都府社会福祉協議会編

体験した人でなければわからないといわれる寝たきり老人介護の苦労。それが家庭内の私事として終わってしまい、多くは社会に明らかにされず、体験が生かされていない。京都府社会福祉協議会が「あなたの体験を福祉に生かそう」と呼びかけて募った在宅老人介護体験記を中心に、今後の在宅サービスや地域福祉活動への提言などを付けてまとめている。

「（略）一瞬、私の心に悪魔が話しかけました。"ほんとうに死にたいのならほっておけ"と……。そして"手伝ってあげれば……"とも。"そうしよう"と私の心の一部が答えました。"そしてお前も死ねばいいよ"と申しました。（略）そのころはこの人の世話にだけ明け暮れていました。（略）その年に長男が高校三年で、三月には大学受験が控えていました。当時の私は、そのことさえも世間の親並みに考えてやる気持ちのゆとりを持ちませんでした。……」

このような手記が二十二編と聞き書き五編。共働きの息子夫婦の代わりに孫を背負いながら、しゅうと、しゅうとめと二人の病人の世話をした五十代の女性もいれば、寝たきりの母親を介護するために結婚もあきらめ、仕事もすてた三十代の息子もいる。

一方で、どんな苦労をしても、失うものばかりでなく得たものもあった、と書いている人が多いのには胸を打たれる。「あれから十年余り過ぎましたが、亡くなる前の晩『お・お・き・に』と言ってくれた言葉は、私の体の中に入りこんでいつも慰められます」（ミネルヴァ書房・一、二〇〇円）

一味七味

カニ缶

土岐　雄三

夕餉（ゆうげ）の膳（ぜん）には、いつもながら数々の料理が並んでいる。——そんなにいろんなもの作らなくてもいいのよ、老妻は娘の配慮を気遣って言う。が、長女はせっせと、なにかしら作って食卓をにぎわす。

大きなガラス鉢に盛られた野菜サラダ。そして冷ややっこ、じゃが芋とコンビーフの合わせ煮、ほかに数点の料理が供せられているが、私は専らカニ缶を飯にのせて食す。他の料理には目もくれない。

おとうさん、召し上がってよ、と娘はいう。いや、おれはこれでいい。私はかたくなにカニ缶に固執していた。サラダもうまそうだし、冷ややっこにも箸（はし）をつけたい。が、私はそのカニ缶に、口に尽し難い愛着があるのだ。

長くつきあった旧友の三回忌に、心ばかりのお花代をお贈りしたところ、未亡人からそのお礼に、と頂戴したカニ缶である。私はそのカニをだれにも食わせない。私の独占物であった。

しょうゆに化学調味料を入れ、これにカニをつけ、温かい飯の上にのせ、口に入れる。なんともうまい。彼もカニが好物であった。生前、カニ料理を肴（さかな）に、酒をくみ交わした記憶も生々しい。

長女、大学生の孫、長女の婿どの、それに老妻、にぎやかな食事の中で、私はひとり静かに、カニだけで飯を三杯も食った。ありがと、ごちそうさん。私はひそかに、旧友の冥福（めいふく）を祈った。

（作家）

西武不動産の今月の建売情報

住まいをつくる西武・環境を創る西武

著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載、配信等ができない場合があります。　国立国会図書館　2014年9月26日